

巻頭言

PHP文庫、岬龍一郎訳、新渡戸稲造著「武士道」を読んだ。岬は新渡戸の「武士道」は、武士道を体系化した唯一の思想書であり、今日の日本が国際化とかグローバル化といわれ、あらためて世界の中の日本を考えたとき、オリジナルの国家意識や伝統精神を見直そうとするのと同じ発想だったと言えるところ。

新渡戸がアメリカから英文で「武士道」を出版したのは、明治三十二年（一八九九年）、三十八歳のとき。病氣治療のためカリフォルニア州に滞在していて、「日本民族が正しく理解されていない」と思ったのが動機ではないかと岬は推測する。だからこそ新渡戸は「武士道」のサブタイトルに「The Soul of Japan—日本の魂」と付けたのだと。この本は世界的にベストセラーになり、特にアメリカのルーズベルト大統領に大きな感銘を与えたようだ。日本には翌明治三十三年、英文のまま出版され大きな反響をよんだ。日本語訳は明治四十一年、丁未出版社から桜井鷗村訳が出版された。

武士道は武士だけでなく日本国民の道徳たり得た理由をキリスト教と比較しながら述べた本書は百年を経て今改めて日本人とは何か、日本人はどうあるべきかを示唆する。決して復古的、右翼的、まして安倍前首相の言う好戦的な内容ではない。百年を経て古びる事なく日本人の本質と、在るべき姿を訴え続けるペンの力を私は感動を持って受け止めた。私達歌人はその人間の真の在るべき姿を韻文によって後世に残す事が出来る幸せな手段を与えられた。あるいはそれは天与の能力なのかもしれない。大切に守り育て、実りあるものにして行こう。

(高崎)

太陽の舟 目次

三十一巻 四月号 (通巻一九二号)

わが愛する歌 — 名歌鑑賞 —

庄司 久恵

巻頭言

高崎 邦彦

二十五首詠

山田田鶴子

阿部正路論 (第九十回)

須藤 宏明

歌誌散見 (第六十六回)

豊泉 豪

作品 I

三澤誠之助 他

二月批評 (作品 I)

宮井 富美

合 評 (座談会)

森田 勝昭

選者十首

岩橋千代子・武田 節子

秀歌抜芳 (二九十号)

森本 元昭・上田やい子

作品 II

高崎 邦彦

文法講座 (四)

佐田 孝義 他

作歌の目・作歌の技法 (第五十一回)

奥田 清

歌帖余白 (六十四)

三木 勝

全国大会ご案内

松岡 三夫

歌会・支部報告 他

山田(紀)・山名・松岡

編集後記

山田(紀)・山名・松岡

題字

阿部正路

表紙

イラスト阿部正冬

40 39 38 36 35 26 22 21 20 18 17 16 6 5 4 2 1

齋王物語

山田 田鶴子

ひこばえのモザイク模様の伊勢平野、各駅停車に揺られふる里

ふる里は齋王のさと のぢぎくのむらさきふるふる振るふも愛し

天皇すめらぎに代はりて伊勢の大神に奉仕の慣ひ 頃七世紀

皇女なる故を選ばる齋王の処女おとめにあらば神に仕ふる

「卜定」とふ占ふ籤くわに選ばれし齋王への日々身を浄めゆく

満月の渡りゆく夜の野宮ののみやに潔齋三年みとせをはりて寂寞

面影の乙女の姿さま変り果て齋宮いづきのみやとぞ古事のあはれは

齋王の髪に櫛さし天皇が「都の方に赴き給ふな」

振り返るさへ許されず決別の運命に仰ぐ空の蒼さは

徒歩かちにまた齋王輿こしに伊勢路ゆく神に奉仕のはるかなる旅

暮れ残る鈴鹿の山を顧みる揺らぐ心根未練か知れず

みやこ発ち五百人余の群行の清らの秋の王朝絵巻

神風の伊勢の重波海の藍 神の坐すれば昂る鼓動

冠をはずし六日の旅をはる十二単衣の裳裾もみだれ

かすかなる水音は皇女の禊らし声なき面輪ゆらす池水

御手洗の池に禊の水流れ懺悔の芥を沈めしまへる

同母弟なる大津皇子に齋王の姉君密か逢ひ給ひたる

ざん言か謀反か同母弟死を賜ふ 大伯皇女の慟哭やまず

齋王に大伯皇女の十三年 ながき夕映え去る人つつむ

業平と齋宮の秘めごとをとつぷり包む竹林の闇

紫雲去り渚の松に夜が来てしのぶ逢瀬にいざよふ月夜

幸せは束の間に過ぎ温もりも恋の思ひも分かつ払暁

愛一行歌に紡ぎて旅立ちの男ありける逢坂の関

今の世に名を残すなき齋王の幾人の悲か風攫ひゆく

ふる里の篁穩し齋王の誇りのやうな悲哀のやうな

阿部正路論（第九十回）

阿部正路論

須藤 宏明

— 〈ふるさと〉という論理—

阿部正路の思考、論考の展開で随所に頻出する用語が〈ふるさと〉である。実体用語であるようで、実は極めて抽象性の高い概念用語である、この言葉は阿部の論理体系の核と言える。とりわけ、阿部は近現代の作家を論ずる際、〈ふるさと〉という問題から入る。論じている対象の作家の作家にとって〈ふるさと〉はありや、なしやという基本的な問を提出する。丸谷才一と田村俊子の論考は、実に対照的である。阿部は、丸谷に対しては、

案外、丸谷才一には、二つの「ふるさと」があるのではあるまいか。（『戦後文学論』桜楓社・146頁）

と婉曲的に推論し、田村に対しては、

田村俊子の場合には、〈家〉も〈ふるさと〉もなかった。（『疎外者の文学』桜楓社・101頁）

と、家系の事実関係から断定している。この二つの極端な言説のあり方は、〈ふるさと〉という用語が、極めて実体的であると同時に、極めて主観的・抽象的であることを意味している。この二人に対する論評を具体的に取り上げ、考察して

みる。実際に、幼少時において、父母に捨てられるようにして離別した田村に対する〈ふるさと〉の概念は、

日本の近代化は、〈家〉を否定し、〈ふるさと〉を否定することにあった。〈家〉は、自我の発展を押しとどめる暗いしがらみにすぎず、〈ふるさと〉は、自立の思想をマイナスにひきずりこむ泥沼にすぎなかったのだ。けれども、田村俊子の場合には、初めから否定すべき〈家〉も〈ふるさと〉もなかったのだ。

というように、出自としての具体的空間と、自立の思想と自我の発展を促す抽象的存在として捉えられている。丸谷に対しては、

風貌体軀は、いかにも東北出身らしい雪に閉ざされ、風雨に耐えぬいた様子であり、彼の語り口も、いかにも東北人らしく重い。しかしながら、彼の書き記したものはいかにもさわやかで速度感があり、鋭い。（中略）丸谷才一には、案外「二つ以上のふるさと」があるのも知れない。彼は英文学者であり評論家であり、小説家であり、国文学者としても通用するある意味での無国籍者である。

と、これも具体的空間と、文体や表現の方法という抽象的存在として捉えられている。この二つの言説を並べてみると、書かれた書物の場所は異なるが、阿部の〈ふるさと〉に対する思念と論理は一貫していることが分かる。具体的な〈ふるさと〉空間が、自己・自我・文体・表現という人間の意識を形成するという思考が、阿部の〈ふるさと〉なのである。具体と抽象を密接に捉える阿部の論理である。

歌誌散見 第六十六回

豊泉 豪

「ひのくに」②

「ひのくに」の二〇〇九年一月号と二月号より、短歌作品を鑑賞する。

・胸のボタンひとつ外してコスモスの道に鮮しき風を受けゆく

空閑 敦子

初句と第二句に前向きな意志が表れている。次に置かれた歌「華やかな過去もありしがさしあたり月のひかりの滴りを享く」も同様、風や月光という自然に対して、受身の歌のようにも取れるが、強く生きようという作者の姿勢が底流にあり、さらにその背景として透明な孤独感を読み取ることができるように思う。ありのままということと、すべてに對し受身に生きるということとはまったく別のことなのだろう。

・海の神・陸の木魅も病むむきようは風たる日の降るばかり

堤 清

海も山も病に蝕まれてしまって、もしかしたらもう手遅れなのかもしれない。けれども、今日は穏やかで静かな日の光が降り注ぎ、そのことがまるであつたかのように思われる。安易な標語のような歌に墮してしまいがちなテーマであるが、この作品では作者の感情が抑制され、そのことによってかえって自然への愛惜の思いや祈りが強くにじみ出ている。リズムのうえでも、

意味のうえでも、三句切れが効いている。

・枯蓮を鳴らして脊振風吹く溶暗の季を乱せる韻き

遠藤 絹子

福岡と佐賀の県境に脊振山地があり、脊振風はそこから吹き降ろす風のことであろう。晩秋の枯葉模様の景色は、放つておいても溶暗＝フェードアウトするように冬へと溶けていくのに、それを乱し急がせるように強い山風が吹き降ろす。旅人ではなく、長年その景を見ているからこそできる作であろう。前号「真回える気力というものがまだありて脊振風に自転車を漕ぐ」も、生活に密着した、風土性を持つ作である。

・葱のもつ臭いをすでに臭わする玉葱苗を別けて植えゆく

井出 正利

〈柗檀は双葉より芳し〉ではないが、玉葱の苗にすでに葱の臭いがするという。この歌をはじめ一連の作からは、葱の臭いととくに、土の香りが漂ってくる。土に触れ、地に根をおろして生きていることの充実感、確かな生活感がある。

・再びを逢わぬと決めて切りし髪逢わざるまに背まで伸びぬ

江副千曳子

逢わなかった時間が伸びた髪に凝縮される。髪はいつの間にか伸びていたというのではなく、今日も逢わない、また今日も逢わないと、苦しい思いを一日一日重ねて、とうとう背中まで至ったというのだろう。〈髪を切る〉というのは、歌謡曲などによくあるフレーズだが、それが伸びるまでを歌っているところに少々不気味さが漂い、おもしろく感じた。

二月批評（作品Ⅰ）

宮井 富美

・仏壇の花枯れし朝一輪の夜露のままの薔薇を供えり

堀井 英範

「夜露のままの薔薇を供えり」。この具象でお仏壇とそのまわりの様子が目に見えます。忘れていたわけではないのに仏壇の花が枯れてしまっている。そんな朝一輪の薔薇を切り取って供える、気持まで見えてきます。

・余り世を歩く速度はゆっくりとまさに蝸牛と競ふが如く

松岡 三夫

シンプルライフを日々愉しくゆっくりとゆとりをもって過ごされていることが一首によく現われています。

・茜さす空が地上に来たるよに能取湖はいまサンゴ草の色

松木 昭子

この一首に風景がよくまとめられています。私も能取湖のサンゴ草の赤は忘れられません。それは遠い日の風景であり今月の景です。

・二十年十月十日忘れ得ず「山寺参詣」孫の運転に

諸 幸子

この日は一生忘れないでしょう。お孫さんの運転ならば尚更のことです。それは敗戦の年でした。そのことも忘れられません。

・病む親の介護の友へ届けたく日がな一日昆布巻を煮る

八代 陽子

昆布巻は一日がかりの煮物です。それを介護の友に届けた一心で作る作者は何という温かい気持の持主でしょう。

・ドウダンの火を噴くばかり燃えたつを風吹きさらふ来む春

のため
山名 恒子

春を待つ物（者）は皆、冬を耐えている。火を噴くばかりとたとえている満天星（とうてんせい）つじを見てこのような作品が出来るとは作者の力量と思う。

・深みゆく晩秋の多摩裸木に柿の実熟れに熟れて鈴なり

湯本 いと

晩秋の多摩の風景が眼に浮かぶ。「熟れに熟れ」とくり返しが、裸木に熟れて鈴なりの柿の印象を強くしている作品です。

・軒並に閉店しらす紙のあり大開発の予感ひしひし

吉岡悠紀子

私にも馴染み深い品川駅前が開発されるということは、聞いている。開発は古いものが消えることでもある。反対の署名、呼びかけのマイクそれらを捉えて七首出来上った。このような事象を目で見、身体で味わっての歌は力強いと思う。

・新しき年に生まるる初孫の誕生待ちるて菊花の咲けり

河口 礼子

新しい年・初孫・お目出度い言葉が並ぶ。大きな明るさが溢れている。「菊花の咲けり」で結句も華やぐ。このような結句で終ると一首が強くなり上品に落着いて上手と思う。

二月批評（作品Ⅱ）

森田 勝昭

・「ガンガンと酒飲んでる」と去年こぞの賀状駄じゃれし友の笑み今は無し
小貫 昭

年末になると恒例の年賀状の時期、またそれと共に誰でもが越し方の一年を振り返る時でもあります。そんな時に一人感じる事は今年亡くなった人。その亡くなった人を想ってしっかりとその特徴を捉えて詠んでいます。

・全身を秋空に置きシルバーの庭師の録音身に小気味よし

近藤 リイ

秋のおおらかな清々しさよく感じられる歌です。自然に溶け込んだ中に暖かな生活が感じられました。特に「全身を秋空に置き」という表現が歌を大きくしていると思いました。

・夢かぞへきみと建てたる家古りて師走をひとり床磨きをり

須澤 淳子

夫婦の夢の象徴である「我が家」、その家も様々な変遷を経て労りが必要な古さになってしまった。それをあえて「ひとり床磨き」と言葉に現しつつ「きみ」と共に磨いているのではないでしょう。暖かいものを感じます。

・たちまちに青く輝き又翳る海は自在に空と溶け合ふ

高崎 邦彦

「海の色は日ざしでかわる」という先人の詩がありました。大きな空と海とを太陽がコーディネートして美しさを出して

いる。大自然の美しさを見事に描き出しました。

・忘れるし記憶のかげら浮上して不意にも言ふ老いたる脳に
武田 節子

前期高齢者、後期高齢者に近づくとも誰もが「忘れる」という事を避けて通れない体験をして嘆いたり諦めたりします。この歌はそれを淡々と歌い上げています。

・歩けざるわれのサンダル庭先に主待つごと雨に濡れるる

鶴来けい子

リハビリにある身の作者、その悲しさや子供の頃の様に自由に飛び跳ねていた頃もあったのに、という悔しさ、それがどうにもしてやれない「サンダル」を擬人化して自分の気持ちを訴えている良い歌だと思います。

・術なしと夫に告知の医師にして吾を手術へと諾ひくれし

富永 道子

相對峙できない程の人生の中の困難、その逃げ廻りたい気持ちを主治医の先生がしっかりと導いて下さったその心境がよく分かる歌です。

・緩やかにバリトンの読経流れ来てしばし忘れつ君逝きしこ
と
中村 武光

読経の旋律は賛美歌も同じですが不思議と心に安らぎを与えてくれます。それが悲しみが深いほど深く救ってくれるように思います。それをこの歌は改めて確認させてくれている歌だな、と思いました。

合評

座談会

E 合評を始めます。今回は二月号から四人の方を選んで一首づつ行きます。最初は森本元昭会員の

オレンジに昇る朝日の静寂に忘れてしまふ己れの存在です。いかがですか。

B やはり「に」、「に」と二つ続くのが気になります。「オレンジに」の「に」を取りたいので、順序を変えて「オレンジの朝日昇り来静寂に」したほうが良いのでは。それと、「己れ」は「われ」としたほうがいい。

H 二句切れは効果的ですからね。

Q 私は「オレンジ」という言葉がとても好いと思いました。空の向こうに自分の存在を越えたものがある感じがして、広がりのある大な歌だと思えます。

H 賛成です。昇ってくる朝日に、太古の光を放つものを見て一瞬、なにも聞こえなくなつたような感じの、厳かな静寂、かすかな自分、結句を「己の存在」としたのは良いのではないですか。上手いと思う。

G オレンジは、オレンジ色としなくては。それはともかく、自分の存在を忘れてしまう情景を詠ったほうがいい、

H 難しいわね。自分の存在を忘れさせる情景を詠むのは、具体的にどう表現するか。

B 全体に歌が散文的だと思う。

E では、次は山本賀子会員の
本当に心素直に詠みたいと思ふ心がちぐはぐになる
です。どなたからでも

H 一瞬の心の動きを短詩型にまとめていくのがどんなに難しいか、読む原点を表現した歌ですね。

Q 素直に詠まれていて、爽やかな読後感がありました。適当な言葉が出てこないで、作者が悩んでいる様子がわかりますし、自分の背丈で、謙虚な気持も読み取れますね。

E この歌には「に」が三つもあるけど・・・。

B 前出の歌ほど気にならない。「に」の仕草なんですよ。格助詞の「に」が、こんなにつながっているのに邪魔にならない。歌としては、「思へと言葉が」なのでしょうが「思ふ言葉」の方が理屈にならなくて面白い。

G 事実はそうであるけれども、言葉を探しているのではなくて、心を探している、のではないか。私なら、「詠まんとすちぐはぐになる言葉から心の本当掻き分け探す」とする。

B それでは添削を越える。行き過ぎである。

E そう、改作になってしまふのでは。

B 添削は難しい。真剣に考えて添削しても、それは違う。作者の意では無いと言われてしまう。本人が、側に居て反論できない合評のなかで行なう添削には、限界があると思う。

E そうです。仲間誉めが多い同人誌の反省の上の企画だからある程度は許してもらえないのです。適正な添削と峻烈な批評があって初めて「太陽の舟」が目指す合評が成立す

る。

E では、遠藤剛会員の

降るほどに夜空を飾る星の数ふるさとは今過疎におののくに移ります。どうでしょうか。

B この歌は上句と下句を逆にしたらどうでしょう。そして、例えば、「ふるさとは過疎におののく降るほどに夜空を焦がす星数増ゆる」としてみる。

G 私なら「ふるさとは過疎のただなか」にしたい。

H 人がいなくなつたふるさどですね。一首の中に「衆」と「寡」を取り入れて上手く組み立てているなあ、と思いましたね。

Q 夜空に星が降るほどにある、というのは空気がきれいで、自然が豊かだ、ということですね。だのに、今は過疎におののいている。書いてはいないけれども、都会は人が多くて空気が汚れていて、星も見えなくなっている。と言うことを言外に含んでいる歌だと思いました。

H そうですね。見えないものが、見えるものから誘発されてきますね。作者の貌も浮き出されてくるんですよ。

G 過疎には過疎の良さがあると思うけど。

Q 主題が明確であって、無駄のない歌だと思いましたね。

B 過疎の人は自然が豊かでよいとは思えないのでは。人も居て自然も豊かであることが人間の幸福なのだと思う。なのだと思う。このような歌は地方からの発想として大切にしたい。

E では、最後の四首目として鈴木美智子会員の

携帯をいまだに持たぬわがこころ皆が持つほど持てなくなり

をとりあげます。如何でしょうか。

Q 携帯をまだ持っていない作者の気持がよく出ていると思う。それで、皆が持つほど自分が持てなくなるという気持もわかりますね。私自身、携帯を持っていないので。

G 携帯を持つということは、忙しくなって、ゆっくり孤独にひたっている時間がなくなるという事でもある。

B 携帯を必要ならば持てばいいし、ここまで意固地にならなくてもと思う。歌の中で「わがこころ」は「携帯を持たない私のこころ」と「皆が持つほど持てなくなる私のこころ」で、「こころ」は上句と下句の両方に掛かっている。その「こころ」が何なのかかわからないですね。と言うよりそれ程重大に考えなければいけない「こころ」なのではないか。

H 誰にでもあると思うけど、「天邪鬼的な心ではないのかしら。世の中に、そういう人もいても良いと思う。

Q 私も時々、携帯をもちたいなあ、という気持がおきますけど、面倒かもしれないと思って持てないですね。

G 現代人の孤独を大切にしている歌とも言える。

B 携帯を切り離せない生活になっている人もいるし。

Q 作者は携帯を持ちたいけど、迷っている感じがします。

B 私も携帯を持っていないけれど便利と社会の一面がこだわらなければ無視できる存在だと思つた。

E 本日はありがとうございました。（記録・山田紀子）

選者十首 (2月号より)

選者 岩橋千代子

廣大無辺の宇宙に命うけ生きこしぬ実に人生は旅すること
なり 渥美 崇子

余り世を歩く速度はゆっくりとまさに蝸牛と競ふが如く

松岡 三夫

あかね色に街はすっぽり包まれて時間が止まりしやうな夕
刻 山田田鶴子

痛みほど頬打ちてくる寒風に向かふほかなし一筋の道

井上萬里子

黄と赤の巨きポインセチヤ買ふ何に逆らふところか知ら
ず 川村 貴美

☆さらさらと指から砂の落つるかに晩秋の陽ははや翳りゆく

木村百合子

絹糸のするりと通りし針ごしにほの安らぎの瞬時漂ふ

紫野 百代

目標を得たりし今日のわがこころ満月に重ね明るさ保つ

黒羽 絃子

たちまちに青く輝き又翳る海は自在に空と溶け合ふ

高崎 邦彦

球形の遊具をまわす子らもなく木枯し童子も素っ気無く過
ぐ 土橋 茂徳

選者 武田 節子

ままならぬ視聴に耐える身の秋に庭の菊花の香ぞ得たり

堀井 英範

病む親の介護の友へ届けたく日がな一日昆布巻を煮る

八代 陽子

深みゆく晩秋の多摩裸木に柿の実熟れに熟れて鈴なり

湯本 いと

もうイヤと思いつ夫の三度目の手術待つ間を耐えがたく居

る 今井 芳枝

夕焼けを乗せた軽トラ木の橋をゆっくり渡る稲藁つみて

近藤 リイ

榎の葉淡きみどりのひと葉ずつ朝光に舞ふ初冬の宴

紫野 百代

庭木々を気ままに渡る尉鷄目にさへ追へぬ早さに去れり

杉山 榮子

山あひに林檎も柿も赤く熟れ夕照り競ふ奥久慈の里

多久和玲子

リハビリの後の痛みの増えし日を初冬の雨が音もなく降る

鶴来けい子

染色体足りぬ幼児に愛を秘め家族の縁をパッチワークに
手塚ミツエ

選者十首 (2月号より)

選者 森本 元昭

子供等が金を恵めと群がりぬエジプト文明いつ途切れしか

丸山孝一郎

川音に誘われ来れば一茎の枯れおくれたる吾亦紅あり

山田田鶴子

輸入ちまき如何なる毒が潜むやら疑りながら空腹満たす

浅見 時子

冬の空満天の星手のひらに縮小させて持ち帰ろうか

尾上 貴子

鉄の橋渡しし工夫らの姿なく渡良瀬源流蒼く澄みをり

末次 房江

夢かぞへきみと建てたる家古りて師走をひとり床磨きをり

須澤 溪子

万両の赤きつづら実輝くを鳥よりお先に床の間に生け

杉本 和子

修験者の風説あまた秘めし山の間に古代の神々が舞ふ

玉川 愛子

歌友の訃報の知らせ言葉失せひと月前に聴きし声追う

富原 澄枝

蒼々と澄み透りたる冬空にあかあか光る木守柿ひとつ

長須 正文

選者 上田やい子

カニニューラに束縛された長き冬炬燵に籠り春暖を待つ

堀井 英範

われ三月母のお腹にいる時に父は亡くなり互に知り得ず

三澤誠之助

満月の隈なく照らす芒野に佇つさびしさの果てもあらなく

山名 恒子

嫁ぎ行く子に手紙書き嬉しくも寂しさ募る秋深きころ

伊藤 モト

破れねば煤けしままの古障子尋めくる人なき気楽さにゐる

岩橋千代子

季^{とき}越ゆる気配もほのと松が枝に遊ぶ鳥影玻璃戸に揺らぐ

川村 貴美

☆さらさらと指から砂の落つるかに晩秋の陽ははや霧りゆく

木村百合子

「ガンガンと酒飲んで」と去年^{こぞ}の賀状駄じゃれし友の笑

小貫 昭

み今は無し
歩けざるわれのサンダル庭先に主待つこと雨に濡れゐる

鶴来けい子

子育ても勤めも終へてやうやくに型にはまらぬ暮しとなれ

原武 寿子

知らぬ間に一世紀こえ尚生きる与えられし命ただ感謝して
渥美 崇子

私は大変うれしい。と同時に大変感動している。百三歳の渥美さんが、巻頭二十五首を詠んで下さった事に。私はとてもと、尻込みなさっている会員の方も多いのではないだろうか。もしそうならば、この渥美さんの気力と胆力を見習って力一杯二十五首詠に挑戦してもらいたい。「太陽の舟」二五〇号記念号平成十七年十月号に渥美さん

は「太陽の舟と私の人生」と言う一文を寄せている。渥美さんが「太陽の舟」に最初に歌を発表したのは、平成元年九月号においてであった。渥美さんは昭和六十三年から平成元年にかけて二度の脳の手術の為入院。入院中に平成に変わった事を知ったと言う。その時渥美さんは八十二歳。私はもう年だからと思っている会員の方も沢山おられるよう。しかし渥美さんから見たら皆涙垂れ小僧。私などまだ四十二年も生きねばならぬ。それから欠詠も無く、毎年夏には外国へ行くので、原稿はエアメールで送っていた。「短歌には人生の欲び悲しみ凡てを託し、心ゆたかに過ごしてゆける、なくてはならないものです。神の恵みと家族友人の愛により今日まで生きてこられた事を感謝してあります。」と結ぶ。この感謝の念は一貫して渥美

さんの心底を流れ続け、それゆえにこそ百三歳の長寿をこうして生きておられるのだとしみじみ思う。秀歌の批評には何もならなかった。しかし、会員の皆様にはこの抜芳を読んでいただいたらもう一度「人生は旅」二十五首を読んで戴きたい。その掉尾は「楽しみも苦しみもありしわが旅路主に感謝して召さるる日まで」であった。

カニニューラに束縛された長き冬炬燵に籠り春暖を待つ

堀井 英徳

「カニニューラ」とは経鼻酸素呼吸器とでも言ったら良いか。肺機能を助ける為に鼻より酸素を送る機器。外出もままならぬ寒い冬。どれ程の気持ちで暖かくなる春を待っている事であろう。人は予期せぬ力に束縛された時、初めて普通の日常がどれ程有難いかを知る。そして今まで何でもないと思っていた小さな喜びを渴望する。抜芳歌はそれが春暖であった。そして小さな生き物にもやさしくなる。美しい詩の世界が広がった。

わが生活すなわち老いて役に立つ携帯電話と思いつく
持つ
森 五貴雄

社会は急速に精神的過疎化へと進んでいる。人間を繋ぐ最も手軽で便利な道具は携帯になってしまった。私はある時期携帯の持つ欺瞞性に耐え切れず携帯を持つ事をやめた。しかしだからと言っ

前々号 (290号) 秀歌抜芳

て何も不便は感じない。作者は違う。色々疑問を持ちながらも、老いてますます生活の手段として必要になると考える。あるいは生計の手段として。作者は老いても尚働き続けようとしているのかもしれない。

こまやかな葉をまだ残す樺大樹ほろびにむかふ葉づれの優し

山田鶴子

「季節の音」と題する七首、作者の感性の細やかさと瑞々しさが過不足なく伝わって来る秀歌揃いである。抜芳歌、その中でもまだ葉を残す樺大樹が葉を落して行く晩秋から初冬の様を「ほろびにむかふ葉づれの優し」で見事に描き切った。「サラサラ」と言う音無き音が聴こえてくる様な気がする。そしてその「ほろび」には「再生」が約束されている事を暗示させる「優し」が生き生きとしている。

満月の隈なく照らす芒野に付つさびしさの果てもあらくなく

山名 恒子

「あらくなく」は連語として「あらなくに」と使われる場合が多い。文末にある時は詠嘆の意味が加わり、「ないことだなあ」となる。作者は初冬の越後路を歩き、親しく良寛に接して来た。人生の達人を思えば思う程、その諸行の無常である事を実感し、美しい満月の夜の芒野でしみじみさびしさに終りが無い事を嘆ずる。歌人として優れた資質

を持つ作者のさびしさの根元は知るよしも無いが。もうイヤと思いつ夫の三度目の手術待つ間を耐えがたく居る

麻酔さめ「迷惑かけて悪いなあ」「生きてるだけでいいよ」と我は

夫病癒えぬと思うこの頃は夫婦の会話は優しくなりぬ

今井 芳枝

もう何も言う事は無い。作者の抱えている苦しみ悲しみは、会員の多くの方々も経験なさっているに違いない。私は夫婦の絆、親子の絆の純粋な叫びに合うと涙しか出なくなってしまう。どんなに辛く悲しくても家族全員で支え合ってほしいと祈る。

幼子を二人引き連れセール柄のチラシ片手にスーパー内を

岡部千代松

幼い子(孫であろう)を二人連れ、安売りのチラシを持ってスーパーを歩く作者の姿が目に見える様だ。あわただしい師走。派遣切りや内定取り消し、民意に遠く直接選べない首相の居握り。世界的恐慌の中で、何もしない日本の政治家程幸せな人は居ない。国会議員は強いから鬱にならないとうそぶいた馬鹿な国会議員がいた。そんな中でささやかな一庶民の姿。これこそ日本人の底力と思って救われる。

冬の空満点の星手のひらに縮小させて持ち帰ろうか

尾上 貴子

尾上さんは月の舟支部の会員であるが、住んでいるのは豊中市千里山丘陵の近く。大阪府の中央部にありながら抜芳歌程に星がきれいなのは、丘陵のすぐ近くだからであろう。私の住んでいる千葉県鴨川も星がきれいだ。今北斗七星が家の屋根に蔽い被さる様に光っている。下の句の「縮小させて持ち帰ろうか」の表現に新鮮な驚きを持った。なぜなら私はそんな事考えた事も無かったから。

平成に生まるる孫の名考へる小春日和の一時憩ふ

河口 礼子

読んでいて苦しくなる様な歌の多かった作者の、真実幸せを実感出来る一時のあった事を読んどてもうれしくおもう。孫はかわいいと言う。しかし初孫は格別ではあるまいか。もっとも私にはまだ一人しか孫は居ないから、断定は出来ない。命名権は祖母である作者にあるのであろうか。そうなら親孝行な子供だ。私には命名権は与えられなかったが、それでもあれこれ考えた五年前を思い出して心が幸せに満ちて来る。

草取りの手にのそりと現われし冬眠前のかえる陽を浴び

梶川喜與志

土に触れる生活をしている人の感性。土の中には色々な生物が生きている。草取りをしていると

土中の小動物に沢山出会う。そんな時、人は殺虫者にはならない。人も虫も皆土に生かされている仲間と思う。だから殺意がない。そんな人間の気持、言うならば自然と一体となっているゆったりとした気持は、自ずと小動物にも伝わる。彼等は警戒心も無く人に近付く。自然の中の人と小動物の心の交歓が心地良い。

刈り込める庭木の際に秋陽さし活きる力の温もり伝ふ

久保田昭江

庭木を刈り込む事でその隙間に陽が差し込む。今まで陽も差し込まずじめじめしていた空間。多くの生命が失われ、あるいは根付く事が出来なかったに違いない、それは人も同じ。太陽から遠い生活をしている者にとって身にまとう全てが生命を脅かすもの。不用なものを切り捨てた時、陽が差し生命力に溢れる。全ての生命の源は太陽である事を改めて刈り込んだ庭の姿を見て感じ取った感性は素晴らしい。

絹糸のするりと通りし針ごしにほの安らぎの瞬時漂ふ

紫野 百代

一瞬の時に移ろう感情を見事なまでに言葉で表現し得た。その力量に感動した。針仕事をしている時、ある程度年齢が行くと、針の穴に糸を通すのは大変な仕事になる。私は子供の頃、よく母の

前々号 (290号) 秀歌抜芳

針仕事の側で糸を通す手伝いをさせられた。それは決して嫌な時間では無く妙にうれしかった記憶がある。今作者は針の穴に労せずしてするりと絹糸を通せた。その安堵感を「針ごしにほのぼの安らぐ」と表現した。見事だ。

夢かぞへきみと建てたる家古りて師走をひとり床磨きをり
須澤 溪子

夫と二人で沢山の夢を数えながら、共に住む家を建てた。家を建てるのは普通一生に一度の大仕事。しかしそんな家も古びて行く。共に生き、共に古びて行くのなら古びの中に新しい夢を見る事も出来よう。しかしもう君は居ない。一人住む家に二人で見る新しい夢なども存在しない。下の句「師走をひとり床磨きをり」に言い知れぬ寂寥感が漂う。

大根漬 今年も味が良ければと願いを込めて重石のせ
外箴よし枝

「大根漬」とは大根の漬物の事である。毎年毎年、自分で作った大根を漬物にして、長い冬の大切な保存食にする。あの冬の大根洗い程嫌だった仕事は無かった。しかし浅漬の大根と餅の相性は抜群だった。漬物を作った事のある人なら誰でも感じる願いを素直に言葉にして好感が持てる。外箴さんとは二反田さんの家でお会いました。今こうして私達の仲間になって下さった事を

とてもうれしく思う。

唯一なる教訓「反戦」六十年昭和を生きし者の遺言

中村 陽子

「武蔵野陵」と題する七首、重い内容を裡に宿して歌われていて、一首たりとも軽々に読み飛ばすことは出来ない歌群であった。武蔵野陵は昭和天皇香淳皇后の陵。昭和天皇からは太平洋戦争を切り離す事は出来ない。昭和の時代の教訓は唯一「反戦」であると作者は言う。それは戦前・戦中・戦後を一所懸命生きて平成に時代を引き継いだ者達の苦渋に満ちた遺言である。「武蔵野陵」は日本人にとって、そんな場所なのだ。作者は言う。私も一度行かねばと思う。

小学校恩師の作りし応援歌口遊みつつ通夜に向いぬ

土方 澄江

応援歌を口遊んでいるのは、心が弾んでいるからではない。小学校の恩師の思い出と最も深く結び付くのが応援歌であり、今はその恩師の通夜に向かっているのだ。おそらく作者は人生の色々な場面で、特に苦しい時には、その応援歌を口遊んでいたに違いない。そのような恩師とそのような応援歌を持って生きた作者を真実うらやましいと思う。ひるがえって、私にはそんな恩師も居なかったし、私自身もそんな恩師にはなり得なかった。少々寂しい気がする。

文語で短歌を詠む人のために(四)

奥田 清

動詞

短歌を詠まれる人は、どなたも国語辞典をお持ちだと思っ
どこの出版社の辞典でも、巻末近くの付録に「国文法要覧」
があり、(1)品詞分類表、(2)動詞活用表、(3)形容詞活用表、(4)
形容動詞活用表、(5)助動詞活用表、(6)助詞一覧表が掲載され、
上段・下段の入れ替えはあっても、必ず文語・口語の活用表
の違いが上下に見渡せるようになっていて、その要覧を手元
に置いて、以降の稿をお読みいただきたい。

(1)の品詞分類表によると、「動詞」とは、(ア)自立語で、(イ)
活用があり、(ウ)単独で述語となることができ、(エ)主として事
物の動作、作用、存在を述べ、(オ)ほとんどの言い切りの形が
ウ段で終わる語である。

作品例によっていまい少し具体的に述べてみよう。

かぎろひのぬくもる 炎ほの白く 闇を ともせし 消
ゆ この歌を文節(文法上、それだけを切り離して発音
してみても意味のわかる、最も小さい単位)に分けてみると、
左のごとくなる。

かぎろひの ぬくもる 炎 ほの白く 闇を ともせし
灯の ひとつ 消ゆ

この文節をさらにこまかく分けてみると、

かぎろひ の ぬくもる 炎 ほの 白く 闇を ともせ
し 灯の ひとつ 消ゆ
となり、「かぎろひ ぬくもる 炎 ほの 白く 闇と
もせ 灯 ひとつ 消ゆ」のように、それだけで意味がわか
る語を自立語という。ところが、「の・を・し・の」は、そ
れのみでは、意味がわからず、自立語に付属して用いられる
語であるから付属語という。

その自立語のうち「ぬくもる」「ともせ」「消ゆ」は、動作・
作用を述べ、単独で述語となることができ、語であるから動
詞である。ちなみに、「かぎろひ、炎、闇、灯、ひとつ」は名詞。
「ほの」は副詞(接頭語)。「白く」は、形容詞、「の・を・と」
は助詞。「し」は助動詞である。

さて、動詞には、活用がある。活用とは、動詞の下に他の
語がつづくとき、とも(灯)さず、灯したり、灯す 灯すと
き、灯せども、灯せ、と語尾が変化する。その語尾の変化を
活用という。活用のある語は、動詞のみでなく、形容詞、形
容動詞、助動詞にもあり、辞書のような活用表で表記するこ
とができる。活用表は、どの品詞も、上から同じ順番に並ん
でいて、その順番は。

未然形・連用形・終止形・連体形・已然形・命令形である。
「ミゼン・レンヨウ。シュウシ・レントアイ・イゼン・メイレイ」
と声に出して唱え、ぜひ覚えてください。

次講は動詞の活用の種類について述べることにする。

作歌の目・作歌の技法(第五十一回)

哲学をする(短歌)(三)

三木 勝

思想はどのようにして出来ているのか。思想は論理的である。論理とは構造的である。論理は自明から始まり、展開を経て結論に至り、そして閉じる。つまり完結するのである。思想は、閉じることによって完結するのである。思想は閉じることによって、思想としての力を持つ。閉じることによって思想としての一貫性を獲得し、一貫性故に生じる力を獲得して、人を動かそうとする。思想が人を動かすとき、思想の論理性によって証明された普遍的自明性を有しているとき、その結論が人を動かすのである。

このような意味における思想は、日本文化の在来的な思考回路の中には存在しない。このような意味における思想とは何かというと、論理によって証明された結論を礎として、その思想の受容者が自らの命をその思想に賭すということに受容者を導いていく作用を持つ思想のことである。例えばキリストンの殉教、戦前の共産主義信奉者の労働者解放のための自己犠牲的な精神、これらはどこから来たのであろうか。キリスト教にしても共産主義にしても、その根っこはひとつである。共産主義という思想はユダヤ教、キリスト教、イスラム教の持つ世界観・歴史観の中から育ってきた。ユダヤ教・キリスト教・イスラム教の持つ歴史観と日本文化が持つ歴史

観とは、全く違う世界である。

この両者が出会って、歴史を相互に語ったとしても同じ語彙を使っているながらも、内実の全く違う意味・同音異義語を使っているの、そこで形成される世界は、同床異夢である。ユダヤ教・キリスト教・イスラム教の歴史観と日本文化が基層的に持つ歴史観との違いは、次の通りである。

前者の歴史観では世界は完成に向かって進んでいて、世界が完成される時は世界の終わりであり、歴史の終わりであるとする。詰まりこの思想における世界観・歴史観では歴史とはその未来も含めて構造的に、初めから終わりまで既にあるものであり、生きている人間は生きている現在の中で、歴史の完成に向けての作業に参画していると考えるのである。この歴史を生きていると感じている人間の目は遙か遠くの歴史の終わり、世界の完成・愛の完成・精神の完成まで見据えているのである。この様な視点からは個の存在は歴史の流れの中で、初めがあり終わりがある歴史全体における部分として明確に見えてくる。全体における部分としての個の存在と個の存在機能・存在理由が、完成・終わりに向かう歴史との関係の中から導き出されてくる。ここから導き出されてくる視点・思想によって切支丹の殉教者や自己犠牲的な共産主義者が生まれてきたのである。

一方、後者となる日本文化の基層的歴史観には、そのような視点はなく、そこにおける歴史とは過去の集積のみを歴史と呼び、現在から先は単なる未来であって、まだ歴史は形成されていず、未来は歴史の中にはいまだ入っていないのであ

る。そこにおける歴史とは過去の寄せ集めの集積でしかない。未来はどの方向へ向かっているのかは分からないし、一億年先、二億年先を見据えたとしても、人類は、そこに行つてみるしかないと考えるのである。人類・人間集団の進むべき未来に、特に目的はなく、またその必要も考えたことがない。歴史の終わり歴史の目的といわれても、むしろその様な問いを持つ人をいぶかしく思うだけである。

かつて日本社会の中には「あいつはアカだ」といって、「思想」という厄介なものに取り付かれた」と厳しく排除する現象があった。長崎で処刑されたキリシタン二十六聖人の中にいたアントニオは十三歳で、中国人と日本人の間に生まれた子であったが、キリシタンの教えを捨ててくれという父母の願いを振り切つて十字架にくぐられ槍で刺された。(注1)この二つの事象から見えてくる共通項は何であろうか。それは、「アカ」と呼ばれた者にも、キリシタンにも自分の命のその先に労働者の解放や世界の完成(愛の完成)が目に見えるように見えていたのである。これが、思想である。世界を構造的に捉え、人間が持つ理念を世界に定着させて行こうと人を行動させるものが思想なのである。二十六聖人の中にルドビコ茨木という十二歳の少年がいた。死刑執行役の寺沢という人物は、棄教をすれば武士にしてやると誘ったが、十二歳の少年は断わり十字架に上つた。(注2)ルドビコには歴史の終わりの世界の完成が見えていた。彼はそのことへの参画のために理念を守り通した。一方、役人の寺沢は目前の少年が不憫でならなかった。不憫な少年を、若い命を助けたい一心

で武士への誘いで手を差し伸べたのであろう。寺沢にとつては、あるかどうかも分からない歴史の終わりの世界の完成・愛の完成・人間世界の精神の完成などよりも、目前の悲惨な事態から少年を助けることが大切と心の底から感じたのであろう。ルドビコ茨木と寺沢の出会い、世界を構造的に捉える者と、世界を常に部分と捉え、現在は次の現在に繋がっていく部分でしかなく、世界は部分部分の連続で、永遠に全体という観念を持たない者との出会いであった。

日本文化の古層・基層には、思想を形成する要素はない。それ故に、構造的に完結した思想を持ち、それに命を捧げる者を「あいつはアカだ。思想という厄介なものに取り付かれ困つたものだ。」と言う風土が存在したのである。だが死刑執行役の寺沢の世界は間違っていたのであろうか。等価に見て、ルドビコ茨木の世界と寺沢の世界には優劣はない。世界観の違いから来る行動の違いがあるだけである。このような寺沢の心のありようを西田幾多郎は次のように言っている。「過去を忘れ未来を思わず、現在に即して見、現在に即して行うというのが我々日本人の特徴であるようにおもわれる。」(注3)その西田が言う。「短詩の形式によって人生を掴む」ということは、人生を現在の中心から掴むということではなければならない。刹那の一点から見るということでなければならぬ。」(注4)ここから哲学者西田幾多郎は短歌に切り込む。

(注1) (注2) 『切支丹の里』 遠藤周作 人文書院 昭和四十六年 十八頁。(注3) (注4) 『西田幾多郎隨筆集』 岩波文庫 青二二四一七 一三三二頁。

歌帖余白（六十四） — 編集雜記 —

松岡三夫

英国ロマン派の詩人は、それぞれが愛好し、崇拜する鳥をもっていました。例えば、パーシー・シェリーは「雲雀」の聲に魅惑され、ひばりを主題と詩を書き、ジョン・キーツは、「夜鶯」の神秘的な声に魅了され、夜の闇に響く歌声を主題に詩を書いています。

ウィリアム・ワーズワースにとつて、詩の靈感をもたらし、彼に生きることの喜びを教えてくれる鳥は「郭公」でした。かれは「郭公に献げる辞」として詩います。

O BLITE New-comer! I have
Heard,

I hear thee and rejoice.

O CUCKOO! Shall I call thee Bird

Or but a wandering Voice?

おお、陽気な訪問者よ！ 確かに汝だ

汝の歌を聴き、わたしは喜びにみたまされる

おお、郭公よ！ 汝がとりであろうはずはない

彷徨える聖なる声ではないのか？

ワーズワースは、一七七〇年四月七日に、北西イングランドの「湖水地方」と呼ばれる風光明媚なコッカマスに誕生。イギリスの代表的なロマン派詩人であり、生まれ故郷の湖水地方をこよなく愛し、純朴であるとともに情熱を秘めた自然

讚美の詩を書きました。同じロマン派の詩人であるサミュエル・テイラー・コールリッジは親友で、最初の作品集はコルリッジとの共著でした。多くの英国ロマン派詩人が夭折したのに対し、彼は長命で、一八四三年、七十三歳で桂冠詩人となり、七年後の一八五〇年四月二十三日に八十歳で逝きました。

ワーズワースには、よく知られている「虹」という次のような詩があります。

空にかかれる虹をみるとき
私の心はおどる

私の生涯の始まった時もそうだった

大人となった今もそうである

年をとつてもそうだろう

さもなくば死んだほうがよい

子供は大人の父である

少年のころこの詩を読んだとき、なんと素敵な詩なんだらうと心を躍らせました。しかし「子供は大人の父である」という一行がどうしても分からない。生きている限り偉大な自然を心から敬いつづけたい、素直に感動する心こそ大人（すべて）の父（もと）である、と詩人は謳うのだと理解したのはずとあとのこと。感動は詩歌の根源です。

遂に、新しき詩歌の時は来たりぬ。あるものは西の詩人のごとくに呼ばはり・詩歌は静かなるところにて思ひおこしたる感動なりとかや

— 藤村詩抄 自序

第十一回（平成二十一年太陽の舟短歌会）

全国大会の「」案内

ようこそ伊藤左千夫のふるさとへ

大会委員長 高崎邦彦 代表

大会実行委員長 原田 寛 千葉支部長

大会幹事支部 千葉支部

開催日 六月二十八日（日）・二十九日（月）

集合時間・場所 午前十一時三十分 外房線大網駅前

開催場所 〈芥川龍之介ゆかりの宿〉 一宮館

住所 千葉県長生郡一宮町一宮九二四一

☎〇四七五（四二）二二二七

参加費用 全行程参加 一八〇〇〇円

歌会のみ参加 五〇〇〇円

投稿歌のみ参加 二〇〇〇円

参加申込 左記まで費用の納入をもって申込みとします。

納入先 口座名義 太陽の舟短歌会

締切 西麻布郵便局 〇〇一三〇―九一三八九六九九

大会詠草 四月三十日（木）締切後の取り消しはキャンセル料が発生する場合があります。

参加者は五月二日（土）までに（必着）

大会出詠一首（未発表作品に限る）を宛

名明記の返信用封筒（切手貼付）を同封の上、左記あて郵送して下さい。大会詠草は六月号に掲載します。

詠草送付先

〒一四五―〇〇六四

東京都大田区上池台一―四〇―一八

山名恒子 ☎〇三（三七二七）二二五〇

日程・内容

第一日（六月二十八日）

11：30 JR外房線大網駅前集合

11：30 送迎バスにて成東へ向かう

12：00 鮎真和食亭にて昼食

13：00～15：00 左千夫記念館・生家・歌碑・食虫植物園

など見学

16：00 ホテル一宮館着

18：00 夕食・宴会・懇親会

20：00 役員会・企画広報会議開催

第二日（六月二十九日）

7：00 朝食

8：30 荷物持参し歌会場へ 写真撮影

9：00～12：30 歌会

12：30～13：30 昼食

13：30～14：30 須藤宏明教授講演

14：35～15：45 表彰式・運営懇談会

16：00 解散 上総一宮駅まで送迎バス

歌会報告

本部歌会2月例会(第349回)

(吉田記)

日時 2月14日(土) 13時~16時40分

場所 きゅりあん(品川区立総合区民会館)

出席 32名 出詠 34首

司会 原田 寛 同人

二月というのに桜の花が今にも開きだしそうなポカポカ陽気の暖かい日でありました。

・武装化を弓なりに耐へてゐる祖国はねかへそうとしても弓なりに
「太陽の舟(列島酷暑)」

冒頭高崎代表から阿部先生の歌の解説がありました。阿部先生がまだ若かった頃の歌で、敗戦の傷跡が各地にその蔭を残していた時代であったと思います。武装化を進める日本国に行く末を大変憂慮されておられたことなど、等々、伺い感銘を受けました。

今月の歌も私には難解なものが多く、又難しい文字もありましたが、先生方や皆様の批評、解説、を聞きながら、車窓に移りゆく景色を眺めるような思いで学ばせていただきました。

今月の高得点歌は左記の通りです。

・こころ弱き日は疵の衣に帯締めて背筋正して風の中ゆく

山名 恒子

・鴉めが干したるかき餅持ち去りぬ一枚残しまあ乙なこと

河野 静子

洪谷支部 支部長/志賀 倭子

(志賀記)

日時 2月14日(土) 10時~12時

場所 きゅりあん(品川区立総合区民会館)

出席 9名 出詠 9首

司会 志賀 倭子

洪谷支部は最近入会者が増え現在出席可能者12名。

今回も山本賀子さん、岡崎くにさんが参加され賑やかな会になり、出詠歌を一首、一首丁寧に推敲しました。

・認知症進みし母の遠ざかる眼つきほのかな気品ただよ

生稲 進

支部歌会終了後、時間一杯使って、太陽の舟二月号は河野さん、武田さんの七首詠を皆で鑑賞しました。

水戸支部 支部長/長須 正文

(塩田記)

日時 2月8日(日) 13時~16時

場所 びよんど(男女センター)

出席 6名 出詠 12首

司会 塩田 秋子

歌会に入る前のひととき、長須先生によるミニ講義「歴史、遺産に学ぶ近現代の秀歌」を勉強した。早いもので今日で60回に達した。今月の歌人は松村英一でした。

・あはれみて吾にくれたる古机古きがよろし君を見るがに

続く歌会では結句が重要、具体的にすると引き締まる事を学ぶ。次の歌の結句は動作で抽象性を回避しよくなった。

・窓たたく夜の北風また明日も寒さの予感カーテンを引く

深谷 充代

水戸支部 支部長/長須 正文

(塩田記)

日時 2月15日(日) 10時~12時

場所 岩間公民館

出席 5名 出詠 10首
司会 深谷 充代

水戸ではまもなく梅祭り。しかしまだまだ寒い日々が続く。年度末が近付いて落ちつかない頃でもあるが、ゆったりとした岩間での歌会は格別によい。

・日溜まりにラジオ聞きつつ大根の切干しきざむ仕事始めに

菅谷 孝子

品川支部 支部長／久保田昭江

(須澤記)

日時 2月19日(木) 12時～16時30分

場所 旗の台シルバースター

出席 8名 出詠 10首

司会 須澤 溪子

会場近く、購読会員でもある鮎店で、企画広報部長に三木氏をお招きして、遅い新年会となりました。場を移して歌会開始。はじめに十月から四ヶ月会館改築のため、会場が使用出来なくなることを須澤担当から説明しました。この日は宮井さんが欠席でしたが、新会員の三澤さんが参加され活発に意見を交わしつつ和やかに進行了ました。三木氏の助言を頂けたことで、助詞の大切さ、感動のメッセージ性、短歌の基本をあらためて考えさせられました。

・枯れかかるわが人生の花にさす肥料にせむと今日の教室

三澤誠之助

柏支部 支部長／末次 房江

(塚本)

日時 2月20日(金) 13時～16時

場所 柏中央公民館
出席 9名 出詠 20首

朝からの雨も公民館に着く頃は止みましたが、曇った風の冷たい寒い日でした。支部長からの連絡事項の後、歌会に入りました。歌一首一首を順番にゆっくり歌評をして、休憩もせず3時間の充実した歌会でした。

・検診を終へても続けたかぶりを静めてをりぬ 雪のバス停

山田 紀子

・夜のしじま友の歌集を読み終へて共に学びし歲月深し

深谷 幸子

千葉支部 支部長／原田 寛

(八代記)

日時 2月21日(土) 13時30分～16時30分

場所 穴川コミュニティセンター

司会 森 五貴雄

出席 16名 出詠 18首

冷たい風が頬を刺す春寒の日でした。

六月開催予定の千葉全国大会に向けて会場の下見を近々行なう話がありました。

鈴木愛美さん(旧盛丹)無事出産され、健やかに成長する伶奈ちゃん二ヶ月の初披露なごやかな雰囲気の中に、見学者二名もあり活発な批評、意見が交されました。

・いまだ病む身をば慰む中ジョッキータンにゆるり喉を走らす

小貫 昭

・掌の中のコーヒーカーップに温みあり妻と語らふ墓のことなど

・こはごはと両の腕に受け取らば嬰兒の温みほのぼの伝ふ

松岡 三夫

添削は次のようにおこなわれました。

加藤かず子

・一身をば慰む中ジョッキー↓身を慰むる中ジョッキ

・一両の腕に受け取らば↓両の腕に受け取れば

・それぞれ共感を呼ぶ歌でした。殊に左党にとって中ジョッキ、

ゆるりは共感を呼びました。

大田支部 支部長／庄司 久恵

(浅見記)

日時 2月23日(月) 13時～16時20分

場所 大森山王高齢者センター

司会 浅見 時子

出席 8名 出詠 10首

今月も三木先生をお迎えして、厳しい、優しいご批評を受けながらの楽しい歌会でした。

・如月の日暮れる空をゆく鳥の影はうすれて霧雨に消ゆ

吉田 幸雄

掲示板

受賞おめでとうございます。いささか旧聞に属しますが、平成二十年九月二十七日に開催された第二十二回全国短歌フォーラムin塩尻に於いて、水戸支部の諸幸子さんが、奨励賞を受賞しました。

・金柑のま白き花のゆふ灯^{あかり}兄の命日近くなりにし

(石塚記)

左千夫のふるさと

今年の「太陽の舟短歌会」の全国大会は千葉支部担当です。

そこで近代短歌史に異彩を放つ千葉県生まれの伊藤左千夫の生家を訪ねます。

左千夫の生まれ故郷の成東の駅に降り立つと、ホームの改札口近くに

久々に家帰り見て故さとの今見る目には岡も河もよし
という歌碑があります。

また昼食の鮎真和食堂近くの浪切不動尊には

石塚の岩部辺の桜ひた枝に苔むす辺に振りさびにけり
という碑があります。

山武市役所のすぐそばの左千夫公園を過ぎるとすぐに左千夫の生家に着きます。

その庭に、よく知られている
牛飼いが歌む時に世の中のものあらたしき歌おほるに起る
の歌碑が威容を誇って建っています。

その前には、左千夫記念館があり、柿本人麻呂を現代に見る感ありといわれる歌人が、一八六四年にこの地に生まれ、正岡子規の『歌よみに与ふる書』に感動し、子規門下に入り、『馬酔木』『アララギ』の中心となっていく足跡をつぶさに辿ることができます。

砂原と空が寄り合って浜辺を歩いている人が蟻のように見える、と歌った九十九里浜も訪ねます。

(原田記)